

みちしるべ文庫 一

霊が光るとき

みちしるべ文庫 1

靈が光るとき

一九九九年六月二十日 第二刷発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九

電話(〇七五)七八一―九六四〇

新しい年を一人で出発するのではなく、キリストさまとご一緒に歩み出しましょう。

荒海の航海に出て行く小さな船に似ているのが私たちです。行く手になにが起こるかわかりません。

何事も起こらないように願うのが信仰者の祈りではありません。そうではなく、何が起こっても、それに充分対処できる力と希望と知恵と安心とを戴いているのが信仰者の姿です。

イエスさまは、「彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださいることです。」(ヨハネ十七章十五節)と、私たちのために父なる神にとりなしの祈りをしてくださいました。

生きるということは、さまざまな事柄に出会うことです。出会うことはどのような事であれ避けられません。しかし、出会いをどのように受け止めるか、ということは私たちの側の責任です。

受け取る側に深い知恵がないとき、人は出会った出来事にいつも踊らされて、喜んでるかとおもうと忽ち文句や愚痴を言い出し、有頂天になっているかとおもうと、次の瞬間には失望落胆してしまうということになります。

しかし、深い信仰の知恵を戴いている者は、出会った事柄から神の声を聞

き出します。そして、その中から感謝を見つけ出してくるのです。

有頂天にさせるような事が、不幸の始まりである場合もあれば、不幸なことだと思われることが、その者にとって最高の幸をもたらす始まりになる、ということだってあるのです。

ですから、どんなことでも短絡的に見て、すぐに文句を言ったり、人を恨んだりしてはなりません。また、すぐに傲慢になったりしてもなりません。

どんな時にも感謝しましょう。その感謝は、その人の内にある霊を光らせることになるのです。霊が光る時、その人の魂は喜びと力と知恵とを得て、知らぬ間に明るさが自分の周囲に集まって来ることになるのです。

(二)

「類は友を呼ぶ」の諺は本当です。暗さは暗さを呼び集め、明るさは明るさを呼び集めるのです。何もしなくても自然に集まってくるのです。

いつも喜んでいる人には喜びが、悲しんでいる人にはますます悲しみが、文句や愚痴を言っている人には、それに相応しいものが集まってきて、ますますそれを深め強めるのです。

人は、自分が関心を抱くことのために努力するものです。そして、その努力は、ますますその人を関心を抱くことの深みへと導いていきます。

(三)

何事に於いても、まず関心を持つということは、とても大切なことです。関心を持つということは、そのものに心ひかれる気持ちを持つ、ということなのです。

関心を持つことができない物事には、決して出会うことはできません。つまり、出会っていても決して出会うことはできないのです。それは、聞いても聞かず、見ても見えず、また、聞いても聞こえず、見ても見えず、ということになります。

イエスさまは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」(マタイ七章七節)とおっしゃいましたが、まったくその通りです。

人は、ものに心ひかれるとき、そのものに自分を開けるようになります。そして、そのものと深い交わりに入ることができるのです。

例えば、風に心ひかれてごらんください。その人は必ず、風と深い交わりに入ることができます。そして、その人は遂に風と一つになり、その人は風になるでしょう。

わたしがこのように申しますと、奇異にお感じになる方がいらっしゃるかも知れませんが、それは本当なのです。わたしは、そのことを体験的によく知っています。

また、木に心ひかれてごらんなき。その人は遂に、木と深い交わりに入り、その人は木になってしまふのです。

もし、私たちが先の風とか木とかに関心を持つことなく、ただ見たり調べたりしているだけならば、その人は決して風や木と深い交わりに入ることはできません。その人にとって、風はいつまでたってもただの風であり、木はいつまでたってもただの木にしかすぎないでしょう。

「愛する」ということは、関心を持つことによつて、そのものと深い交わりに入ることです。そして、交わりとは、そのものになることでもありません。「愛する」ということがそのようなことだとするならば、自分が何に関心を持ち、心ひかれ、愛するかということとは、極めて重大なことであると言えます。何故ならば、うかうかと、とんでもないものを愛したならば、自分を破滅に陥れてしまうことになるからです。

(四)

「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」(マタイ六章二十一節)とイエスさまはおっしゃいました。

心の在りようは、その人のその時の在り方のすべてなのです。その時には、その人の身体のすべての動き、知恵のすべての働き、感情の色合いも凡てがそのようになつていて、それ以外のなものも受け入れられないのです。心の在

りよりの凄まじさを感じます。

(五)

自分づくりは自分です。その主役は自分の思いです。

思いが固まると、だれもそれを交えることはできないのです。例えば、この度のイラク国のフセイン氏の固まった思いは、どのような人も力も交えることができませんでした。

人の思いは、その人の思いのみが交えることができるのです。たとえ外圧に屈して交えたように見えても、その人自身が自らそのように交えなければ、必ずその思いは蘇ってきます。復讐ということは、そのような思いの事情をよく示しています。

自分が何に関心を向けるかということの恐ろしさ、凄さをいま一度よく確認しておきましょう。

それにしても、私たちの思いというものは、その殆どが一種の思い込みによる幻想なのです。何かのことでヒョット目覚めたとき、「なぜ私はこんなことにこだわり続けていたのだろうか」と気付きます。

思い込みとは、自分で自分を縛り上げてしまうことです。思いの恐ろしさは、何よりもまず自分自身に向けられる、ということなのです。自分を狂気にしてしまうのです。

(六)

赦してあげなさい、とか、憎んではいけません、などという言葉を聞くと、私たちは、そうすることをただ相手のためにしてあげるのだ、と思います。しかし、そのような考えは間違っています。それは相手のためになることではなく、実は自分のためにするのです。

相手のためにするのだと思うと、それはとても苦しいことのように思えてきます。しかし、自分のためにそのようにするのだ、ということが理解できますと、喜んで赦すこともできますし、静かに耐え、相手を憎むことはしなくなるものです。

相手を赦したとき、その恵みは相手に行くだけではなく、自分自身の方に帰ってくるのです。その場合、もし相手がその赦しの恵みを受けなかったなら、その恵みは一〇〇パーセント自分に帰ってくるのです。そして、自分づくりの大きなエネルギーとなるのです。

このような自分づくりの秘密の構造を多くの人々は知りません。親切が報われないと、すぐに怒る人がいますが、その場合、その人は親切を施すことによって、かえって自分自身を汚してしまつたのです。

(七)

信仰を持つということは、善行をすることだ、と思ひ込んでいる人がいま

す。そのように考えることは間違ひではありませんが、その場合大切なことは、心から喜んずることです。それはどういう意味なのかと申しますと、善行をすること自体がよいことなのではなく、善行をするその思いがその人をよく育てるのだ、ということなのです。ここの所を注意深く弁えておくことは、とても大切なことであります。

ですから、善行をすることによって、恨みつらみを持ちたり、自分の内に不満を抱いたりすることがありますが、そのような善行は、かえって自身を極度に汚すことになるのです。ですから、そのような結果を招く善行ならしない方がよいと言えます。

「不平を言つてはいけない。不平を言つた者は、滅ぼす者に滅ぼされました。」(第一コリント十章十節)と使徒パウロは言いました。

また、このことを「全財産を貧しい人人のために使い尽くそうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」(第一コリント十三章三節)と、彼が言うのも同じことです。キリスト者はここのところを間違つてはなりません。

(八)

「善行がその人を清めるのではなく、善行をするその思いがその人を清めるのである」ということを再びしっかりと確認しておきましょう。

ですから、たとえ自分の全財産を人のために渡しても、もし愛がなければ

それは空しい、と聖書は教えるのです。愛がなければとは、その行いに伴う神と人に対する感謝と喜びとがなければ、ということです。

神と人に対する感謝と喜びを伴った行いであるならば、それがどのような行いであろうと、その思いの故にその人は天に宝を積むと同時に、自分自身をも豊かにさせているのです。

そのような人は、ますます喜びと希望と力とが増し加わり、必ず良き友に出会い、苦しみ悲しみはその人から去って行くことでしょう。

(九)

思いを鎮めたり、思いを清めたりすることはとても大切なことです。何故ならば、思いが荒れていますと、それは完璧な扉のように、どんな良きことも自分の中に入れてくることを遮断してしまふからです。

頭では理解でき、理屈では分かるのですが思いがおさまらない、といううな時があります。とにかくムシヤクシヤするとか、腹が立ってしょうがないとか、ムカムカして鬱憤がおさまらない、などということは誰でもが経験していることです。そのような時、口汚く罵ったり、何かに当たり散らしたりします。

しかし、そうすることは、自分自身をとて汚すことになるのです。それは道徳的に善いとか悪いとかいいうことではなく、とにかく自分を汚すのです。

では、自分自身を汚すと、自分がどのようになるのかといえますと、自分の内の聖なる靈的活動が消滅してしまうのです。このことをもう少し具体的に申しますと、聖なる靈的活動とは、聖なるもの、つまり神的なもの、超越的なものとの交わりのことであり、結局自分自身を汚すと、神的、超越的なものとの交わりが無くなり、この世的な俗の世界に自分自身を縛ってしまうことになるのです。

そして、そのような人に何が起きてくるのかと申しますと、外面的にはどのような変化も現れません。しかし、その人の内面においては、ますます現実志向が強まります。

そのような人は、本当の善や美や聖を受容しようとする働きが減退し、神聖なる調和と喜びや平安などを得ることができなくなってしまうのです。すべての発想が現実的になり、すべてのことを現実的に理解します。また、いつも批判的で闘争的で合理的な人になりますし、利己的な者となります。

では、どのようにすれば、私たちは自分自身を汚さずにすむのでしょうか。また、どのようにすれば、汚しそうになつた自分をそのところから逃れさせることができるのでしょうか。

(十)

内からこみあげてくる怒りや恨みやその他さまざまな思いは、誰も押さえ

付けることはできません。にもかかわらず、無理矢理に押さえ付けようとし
ますと、必ず別な形で問題が出てまいります。ではどうすればよいのでしょ
うか。

そのために、「言葉」と「イメージ」とを自分の内に持つことは、とても
大切なことです。

いつまでも自分の思いが収まらないということは、私たちが自分を掻き乱
しているイメージとか言葉とかを自分の思いの内に持ち続けているからです。
それがひどくなりますと、寝ても覚めてもそのイメージや言葉を自分の内に
持ち続け、遂にはそれらが自分を支配するようになるのです。そのところか
ら逃れるために、自分を支配している思いを押さえ付けたり、忘れようと努
力しても効果はありません。

では、どのようにすればよいのでしょうか。それには、さきに申しました
「言葉」と「イメージ」とを自分の内に持つことでもあります。

また、どのような「言葉」と「イメージ」とを持てばよいのでしょうか。

(十一)

自分という者をどのように認識するかということは、自分づくりの上でと
ても大切なことです。自分づくりの第一は、「自分は、神によって創造され
たものであり、自分の内には神のいのちが宿り、神に限りなく愛されている

ものである」という自覚を持つことであります。聖書は、人がどれほどに神に愛され、思いをかけられているものであるか、ということをお私たちに示しています。

イエス・キリストさまの人に対するさまざまな愛も、そのことを示す証なのです。キリストさまが差し出された救いの御手は、そのまま、いまの私たち一人一人に対して差し出されつつある神の愛と救いの御手なのであります。「神は、私の日々の導き手、助け手である」という言葉を自分の内に確信をもって持つとき、その時から私たちは変わりだすのです。

しかも、キリストさまの救いと助けを受けた人たちを、そのまま自分に置き換えてイメージし再現するとき、キリストの働きは、そのまま自分の上になり、助けとなり、救いとなってくるのです。

(十二)

キリストさまは、足なえに「そうしてあげよう、清くなれ」と言って、手をおき、立たしめられました。その姿と言葉とを自分に描き、聞き、同時にその御手を自分に感じるのです。何度も何度も繰り返し、それを黙想しつつ、深い吸いの呼吸をなして、自分の内にキリストの愛を受けるのです。

(十三)

イエスさまの足跡を福音書で読むことは、大切なことです。読むとは描くことでもあるのです。描くことは、自分の内にそれを再現することでもありません。それは、自分の胸の内にイエスさまの命の働きを躍動させることになるのです。そのことを使徒パウロは、「キリスト我が内に生きるなり」と言いました。

(十四)

イエスさまを自分の内に迎え、自分の主人になっていただくこと、これが祈りなのです。わたしの手がイエスさまの手となり、わたしの足がイエスさまの足となる、そしてわたしのすべてがイエスさまの身体となるように、イエスさまに自分を明け渡すのです。これが「キリスト我が内に生きる」ということなのであります。

(十五)

自分の内にキリストを迎え、自分の主人となっていたただくためには、自分の内に後ろめたい思いや事柄を持ってはなりません。言うならば、自分の思いの内は、清廉潔白でなくてはならないのです。そのためには、あとになって悔やむかもしれないことは、決してしてはなりません。いつも自分自身の信仰に確信を持つためには、自分を汚すようなことは慎むべきです。

(十六)

疑いを自分の内のどこかに秘めていますと、その祈りは空回りしてしまいます。と同じように、自分の思いの内に、不安や隠し事や怨みや憎しみの思いなどを秘めていても、祈りは空回りしてしまいます。

大切なことは、どんな場合でも、神やキリストに対する確信をもって祈ることです。疑いも不安、憎しみも包み込んで清めてくださることを確信して祈ることです。

(十七)

確信をもって祈るといふことは、自分自身に確信を持って祈ることです。といふことは、たとえ自分がどのような失敗、罪、不安、怒り、疑いなどを内にひきずっていても、神の愛はそれよりもはるかに大きいので、必ず自分を聖め、包み、赦し、強めて下さるといふ自分についての神に対する確信をもって祈ることです。

(十八)

善を行う多くの人びとの中に自分を置くとき、知らないうちにその感化をうけ、励ましをうけ、力づけをうけます。自分と神との関わりは、基本的に大切ですが、同時に自分がどのような人びとと交わりをもつかということに

も充分に気を付けねばなりません。「俗悪な無駄話を避けなさい。」（第二
テモテ二章十六節）

（十九）

自分は、初めから自分であるのではなく、自分は自分によって造形される
のです。言わば、今ある自分は自分によって造形された自分なのであって、
自分についての責任の大半は自分にあるといえます。「二十歳を過ぎれば、
自分の顔に責任を持って」といわれるのはこのことです。

自分を造形していく道具は、いつも言いますように自分の念いです。「念
は力である」ということをもう一度思い出してください。

（二十）

では、自分の念はどのようにして生み出してくるのか、それは自分自身で
生み出すようであって、自分に生み出さされるものでもあるのです。

言うならば、いつも自分に先だっている自分自身が自分にいるのです。そ
の自分は、自分を越えている自分であり、従って自分を越えたものと繋が
り、命している自分なのです。その自分に自分を結び付ける責任は、自分にある
わけで、それが生きることの意義であり、目的なのです。

(二十一)

この世に於ける生は一時です。人は過去より来て、未来に進んで行くものです。過去とは前生であり、未来とは来生です。共に一つの命です。その一つの命が前生では前生の形を持ち、現生では現生の形を持ち、そして来生では来生での形を持っているのです。

その形は連なっていないません。それは、あたかも蝶の幼虫と成虫とが形に於いて連なっていないのと同じです。しかし、形を越えた命は一つなのです。ここのところをもう少しお話ししましょう。

(二十二)

どのようなものにも、その形があります。形という漢字は「あらわれ」とも読みますが、形はその命が現れた言わば一時の姿なのであって、決して永遠のものではありません。もともと命は様々な形で現れるのです。しかし、私たちは、現れた姿形そのものを命だ、と思い込んでいますので、その姿形が無くなれば、命も無くなったと思ってしまうのです。万物は命の現れた一時の姿形にしかすぎません。しかも、この世という限定された姿形にしかすぎないのです。

(二十三)

すべての形、即ち物は、思い（念）が固まって出来たものです。地球もそうであり、勿論宇宙もそうです。では、その思い（念）の根源はどこにあるのでしょうか。それは神の意志なのです。

神の意志といっても、神という形があり、それに意志があるという意味ではありません。言わば、神とは意志そのものなのです。命（いのち）そのものなのです。命そのものとは、絶対の動なのです。人間には白光としてしか感覚できません。どのような形もないのです。

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。」（ヘブル十一章三節）

「唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることできかない方です。」（第一テモテ六章十六節）

「わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということ。わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行ってはいけません。しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。」（第一ヨハネ一章五―七節）

(二十四)

神さまがいて、そのお方に意志があると私たちは考えます。それは、あたかも人がいて、その人に意志があると考えerのと同じです。ですから、人のような超人を神のイメージに描くことになるのです。しかし、それは全くの誤りです。そもそも人に於いてもその考えは間違っているのです。人間も実は意志体なのであって、人が意志を持つているのではなく、意志がたまたま肉体という物に於いて働いているのが、私という者なのです。ですから、決してこの体が当の私自身ではないのです。体が無くなっても私は無くなりません。体はどこまでも「私の物」で「私」ではないのです。

(二十五)

それにしても「わたし」とは何なのでしょう。わたしは頭なのでしょう。わたしは顔なのでしょう。わたしは胴なのでしょう。わたしは腕なのでしょう。……勿論、わたしは、頭でも顔でも腕でも……ありません。わたしはそれら以上のものなのです。わたしは、わたしの身体以上のものなのであります。

それでは、わたしは感情なのでしょう。そうではありません。わたしは感情以上のものなのです。痛み、故障し、やがて無くなる肉体がわたしではなく、それ以上のものであるように、たとえ感情がわたしのものであっても、

わたしは感情以上のものなのであります。

わたしの感情は絶えず変化しています。また、絶えず矛盾した姿をあらわします。優しさと怒り、喜びと哀しみ、憎しみと愛……しかし、わたしはそれら以上のものであり、それらに支配されないのであります。わたしは感情を持っていますが、感情を観察し、支配できる感情以上のものなのです。

(二十六)

私とは一体何なのでしょう。さきに、わたしは身体でも感情でも、知性でも感覚でもなく、それらは私に属していても、わたし自身ではないということを描きました。確かに私達は、あるとき、ふと自分の手足をまた顔を、全く自分のものでなく、あたかも他人のそのように、また一つの物体のよう眺める時があります。このようなことは、誰でも一度は体験していることです。

私とは、私のもの以上のものなのです。怒っている自分を見ている自分があるのです。考えている自分を見ている自分があるのです。そして更に、それらの自分を見ている自分があるのです。その自分とは、一体何なのでしょう。

その自分をセルフと呼ぶことにしましょう。セルフは形を持ちません。セルフは捕まえることもできません。捕まえたと思うと、スルリと逃げていき

ます。しかし、セルフは感じることはできるのです。

(二十七)

セルフの世界は安心の世界、平安の世界だといえます。「胸に一物、背に荷物」と言いますが、自分の内に様々な想いを一杯持っていますと、それに伴う思い煩いが生じるものです。しかし、自分の内にどのような想いもなければ、カラリとした気分でいられます。それを「無障の世界」と言いましうか。つまり、どのような障りも無い世界ということですが、そのような世界が安心の世界、平安の世界なのです。セルフとは、そんな世界に生きる命のことであるといえ、少しは感じていただけではないでしょうか。

自分の内に秘めていたことをすべて出し尽くした時の爽快感、その意味で「告白」ということは、私達にとって重い言葉だといえます。ともかく、セルフの世界は実にかラッとした何の障りもない世界のことであり、そこでの命そのものがセルフなのです。ですから、絶対の安心、絶対の平安、全き安堵、無色透明そのものがセルフなのです。

(二十八)

私たちの一番外側には肉体があり、その内側に自我という意識の世界があります。普通一般に自分自身として意識できるのはそこ迄です。それ以上の

覚は、快への欲望に基づいて、私達のすべてを方向づけ、行動へと駆り立たせてしまうのです。つまり、「つい、欲にひかれて……」ということになるのです。

しかし、快感というものは、それ自体絶対的なものではありません。より大きい快に対しては、快でなくなってしまう霧のようなものなのです。

(三十)

快はより深い快を求めます。しかし、快を求めることは、苦に連なるのです。何故ならば、快を求めていくにしたがって、快に縛られてしまうからです。快の虜になってしまうのです。例えば、麻薬中毒はその代表的な出来事です。

快を求めると、必ずその虜になって、遂にセルフを見失い、感覚も麻痺してしまいます。「もう、どうなってもよい」という、最も恐ろしい思いが生じ、その思いがその人間を完全に支配してしまうのです。

しかし、その実、そのような快とその思いは幻想なのです。過ぎてしまえば夢のようで、実体のないものだったことに気付くのです。幻想は、セルフのみが見破ることが出来るのです。

(三十一)

本当の快というものは、私達の表面感覚に於ける快を越えています。

本当の快から表面感覚に於ける快を見るならば、もはや、表面感覚の快は煩わしい快であると言えます。

このことに就いて、少し具体的に申し上げますと、例えば、喜びということとは、一種の快であります。しかし、その快は、いつも何かとの関わりに於ける快なのです。褒め言葉を聞くとか、何かを戴くとか、何か快い音楽を聞くとか、また美味しいものを食べるとか、肉体的な快感を得るとか、とにかく、何かとの関わりに於いて快をえる快なのです。

実は、その何かとの関わりによって生み出される快ということが問題なのです。

(三十二)

快とは、本来その人の好みによるものではありません。

本来の快とは、人の好みを越えたことなのです。好きとか嫌いとか言つて、それぞれの好みによって選ぶことではないのです。どのようなことも、それが本当のことであるならば、すべて快なることなのです。

快を「こころよい」と読むならば、すべて本当のことは、こころよいことなのです。

「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」とありますが、火といえども本当は

「こころよいことなのです。」

「感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない……」（第一テモテ四章四節）とパウロが言うのも同じです。

世の中には、「つまらないもの」「だめなもの」または、世間が「見向きもしないもの」「全く気付かないこと」といったそれらに、すごい価値を見出したり、与えたりする人がいます。

そのような人は、本来そのものや事柄が秘めていた、こころよいそれを見付け出したにすぎません。もともとあるものを在るとしただけなのです。こころよいものをこころよいものとして、引っ張りだして来ただけなのです。それは決して、自分の考えや好みでこころよいものとしたのではないのです。名曲とか名作と評価されるものは、そのようにして出てきたものなのです。

（三十三）

名作といわれるものが秘めている良さとは、それに接する人たちに「こころよさ」つまり快を感じさせるところにあります。反面、駄作といわれるものは、不快を感じさせるものです。

この場合のこころよさを感じさせるとは、人が秘めているセルフが共鳴するということにほかなりません。

私達が秘めているセルフは、極めて直感的に働きます。そこには理屈はあ

りませぬ。また、感情すら入る余地もないのです。とにかく「パツ」と一切を見通してしまふ働きののです。

「これは悪い」と瞬間に知り感じるのですが、欲心が働いたり、計算による損得心が働いたりして、セルフの声に聞き従わなかつたばかりに、あとになって、取り返しのつかない失態をしてしまふというようなことは、世間にたくさんあります。

「あのととき、止めようと思つたのだが、やっぱり止めておけばよかった」と後悔することは、誰にでもあることです。

×

×

自我の底にセルフが働いているのです。正しく物事を見たり、聞いたり、考えたり、思ったり、感じたりする働きは、セルフだけが出来るのです。ですから、私たちが良く生きたいと願うならば、セルフの思いに従って生きればよいのです。

セルフを自分の生きる指導者として、自分に浮かび上がらせる作業のことを「自分を磨く」というのです。つまり自我を摩り減らすことによって、セルフを現成せしめる作業のことです。

セルフのことを真実の自己とか、本当の自分とか言いますが、霊としての自分ということもできます。まことに素晴らしい自分が私の内に居るのです。

「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿（宮）であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」（第一コリント六章十九節）

これは、使徒パウロの言葉ですが、彼は私達がどのような者なのか、ということをここで語っています。あなたは聖霊が住む宮なのです。そして、あなたはあなた自身のものではないと。つまり、神のもの、聖霊自身のものなのであると言うのです。

これは一体どういうことなのでしょう。しかし、決して戸惑うことはありません。むしろ、小躍りして喜ぶべきなのです。というのは、わたしという者の存在の根拠そのものが、どれほど素晴らしいものなのかということが、ここに明確に語り示されてあるからです。

今まで、私はわたしである、と思っていました。それで、私という者が分かったような気になっていたのです。しかし、その実、わたしは何も分かってはいないのです。もう一度よくよく「わたしは私である」という判断を吟味してみましょう。どうでしょうか。果たして、「わたし」というもののがはつきりしたでしょうか。「わたし」について、すっきりとしたでしょうか。

おそらく、すっきりとしないのではないのでしょうか。なぜでしょうか。そ

れは、わたしという者の根拠がつかめていないからです。

あなたの体は聖霊の宮であり、もはや、あなたは神のもの、聖霊ご自身のものである、というのです。

わたしは、わたしではなく、わたし以上のもの、神のもの、聖霊のもの、それが私の根拠なのです。

(三十五)

エゴとしてのわたしは、とても醜い面をたくさん引きずっています。そして、あげくの果ては朽ちて滅んでしまうものなのです。エゴとしての自分を満足させるためにだけ自分を生きる人生、それはとても果敢ないことだ、といえます。

エゴを私達は捨て去ることはできません。エゴを正しく活かすように努めねばならないのです。そのためには、エゴの根拠を知ることです。

わたしの内に神が住んでいる。エゴの根底に神を戴き、その神がエゴとしてのわたしを支えているのです。

この私という者の存在の秘密に目覚めるとき、エゴは正しく生きはじめるのです。

(三十六)

エゴを捨てる、エゴを無くすといっても、私達はエゴとして生きていますから、そのエゴを捨てたり、無くしたりするならば、もはやこの世で生きてはいけないわけです。

エゴのことを「わが身」といえば、そのことがはっきりとします。

問題は「わが身」としてのエゴをどこに置いて生きるかということですが、そのことで、使徒パウロは「わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うではありません。」（第二コリント十章三節）と言います。彼は肉体人間として生きているが、肉的智慧に支配されて生きているのではない、と言うのです。以下、このことについて考えてみましょう。

(三十七)

「肉に於いて歩んでゐる」とは、わが身を引きずって歩んでゐるということです。しかし、そのこと自体は悪でも善でもありません。それはそれで一つの自然な姿なのです。にも拘わらず、そのこと自体を善とか悪とか決めつけるのは誤りです。何故ならば、それ自体善なるもの、悪なるものなど、この世には何一つないからです。それを悪にするのも善にするのも、私の思いと関わり方でありませぬ。

包丁は悪でも善でもありません。料理の道具として使えば、便利で良きものです。しかし、人を傷つける刃として使えば、それは凶器となり悪いもの

となるのです。私達の肉体的なものも同じです。

(三十八)

とは言っても、ことは決して簡単ではありません。言うならば、私たちは「わが身」を持って余しているのです。「わが身」に振り回され、翻弄され続けているのが私たちの生活です。その意味では「肉に於いて歩んでいる」という現実は凄まじいことだと言えます。しかし、使徒パウロは「肉に従って戦うのではない」と言います。つまり、肉をひっさげて生きてはいても、私は神の助けによりたのんで生きています、と彼は言います。

問題は「肉」としての「わが身」の置きどころを何処にするのか、ということ。パウロは神の中に置くのです。

(三十九)

「わが身」を神の中に置くとはどういうことなのでしょう。また、どのようにすればよいのでしょうか。

神の中に置くとは、神の思いの中に置く、ということ。私達は「わが身」を自分の思いの中に置いている者です。しかし、このような語り方は、とても抽象的で具体的ではありません。ですから、分かったような気にはなりません。もう一つハッキリとしません。

神の思いの中に置く、ということをも具体的に考えてみることにしましょう。とても大切なことが見えてくるに違いありません。

(四十)

神の思いと肉の思いとは違います。どこが違うのかと言いますと、この世の栄光を基準にして考えるのが肉の思いです。しかし、神の思いは神の栄光を願いとして考えます。

常識的だとか、人情的だとか、死ぬとか病気になるとか、損するとか得するとか、あの人に悪いとか、とにかく、この世を見据えての発想のすべてが肉の思いなのです。

かつてペテロが、イエスさまのことをおもんばかりで、「エルサレムへ行くとくことは、死に行くようなものです」と諫めた時、「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」(マタイ十六章二十三節)と言われたことを思い出します。

(四十一)

ここで少し立ち止まって、しっかりと確認しておかなくてはならないことがあります。それは、「肉の思い」とか「霊の思い」とか言う時、私達は善悪の基準でそれを語ったり、理解したりします。即ち、「肉の思い」は悪で

「霊の思い」は善であると言うふうには理解いたしません。しかし、善悪の基準でこれらを理解してはなりません。

そうではなくて、肉の思いや霊の思いが、どのような機能を持っており、従って私達にどのような結果をもたらすのか、ということについて知ることが大切なのです。ここのとこを押さええないで、ただ善悪のこととしてみ見ると、必ずいろいろな疑問をもつことになります。

この世のものは、すべて形をもっています。形は、私達の目に見えるものです。

しかし一方に、私達の世界には目に見えない心の世界があります。

目に見える形の世界と、目に見えない心の世界とは、どのような関わりをもっているのでしょうか。そのような世界に、私達はどのように関わっていかばよいのでしょうか。

「人はパンのみで生きるにあらず、神の口からでる言葉で生きる」と言われたイエスさまのお言葉に隠された意味を同時に問いつつ、私達の幸なる生き方を学んでみたいと思います。

(四十二)

「肉の思い」とは私達の表面感覚が働いている世界です。私達はこの世界で生活しています。つまり、見る、聞く、味わう、嗅ぐ、触れるといった世

界です。そしてそれらは、快を求める欲望に基づいているのです。その基本的なものは、食欲と性欲です。それに加えて名誉や権力欲にまつわるさまざまな欲求が複雑に絡んできます。

しかし、これらの欲望や欲求は、それ自体、悪でも善でもありません。言うならば、すべて神様が私達に下さった機能です。

そして機能とは「目的のある働き」のことですから、肉の働きのすべては、大切な目的が、そこに秘められているのです。

(四十三)

この世のすべては、一つの目的を秘めています。一つの目的と言う観点から見れば、この世のすべてのは多種多様でありつつ、一つなのだと言えます。その一つの目的とは、神の栄光を現すということです。

しかし、神の栄光を現すのがすべてのものの目的であると言っても、私達には、すぐに理解できません。

それはどういふことかと言いますと、例えば、太陽の光について見ますと、光はただ明るくするためにだけあるのではない、ということはよく知っています。光はさまざまな働きを持っています。第一に光は、植物や動物、もちろん人間の成長と生命の促進になくはならないものです。風も、雲も雨も太陽の光が関係しています。

(四十四)

太陽の光は、沢山のものを生かす働きをしています。その働きが善いとか悪いとか判断する以前に、その働き自体が神の栄光を現し、示し、語っているのです。そこに輝き、多くのものに光を降り注ぐことによって、多くのものに機能しているという、そのこと自体が即、神の栄光なのです。

しかし、私達はそのようには考えません。太陽の光はどのような働きをして、どのような善いことをし、どのような悪い影響を与えているか、と様々な観点から科学し、判断し、価値を云々します。そして、その結果、善いとか悪いとか決定するのです。このような関わり方では、神の栄光など決して見えてきません。

(四十五)

宇宙が恰も人間中心に在るものだと私達が思っているなら、これ程の誤りは外にありません。しかし、私達はそのような誤った思いをもって宇宙を見てしまいがちです。事実、太陽系宇宙を地球中心に考え、地球を人間中心に考える考えは、今でも私達の思いの中にあります。

すべてを人間中心に考えるということは、人間の都合でそのものの価値を決定するということです。

人間にとって都合の悪いものは悪であり、価値無きものとなり、都合の善

いものは価値があり、善なるものとなってしまふのです。

その結果、都合の悪いものは抹殺されていくという、恐ろしい独善的な行為が平気で行われてしまふのです。

しかし、地球は、決して人間の為にあるものではありません。神の栄光の顕現として、そこには創造の自然そのものが、それによって神の息吹の偉大さと栄光とを命しているのです。

それは、人間風情が善いとか悪いとかなどと価値付け出来るような事柄ではないのです。

宇宙は、そこに存在する誰かのためにあるものではありません。ただ、神の命の息吹の顕現そのものとして、神の栄光として現れているのです。

あ と が き

本書は、松下昌義先生が、一九九一年の一月から十二月まで、左京キリスト教会の『週報』に、「今年の主題聖句を黙想する」と題して、連載された文章をまとめたものです。

先生は、いつも私たちに、信仰者として自分の思いを管理することの大切さを語ってくださいますが、ここには、そのための方法がわかりやすい言葉で、具体的に書かれています。

必要に応じて何度も読みかえしながら、常に私たちを支えてくださっている神さまのお恵みに心をとめ、イエスさまと共に一日一日、歩ませてくださいたいと願っております。

この小冊子が主に祝福され、お役に立つことを祈りつつ。

(林 道子)

一九九二年三月